



# 魔術

芥川龍之介



青空文庫



青空  
文庫

ある時雨しぐれの降る晩のことです。私わたしを乗せた人力車じんりきしゃは、何度も大森界隈おおもりかいわいの険けわしい坂を上ったり下りたりして、やつと竹藪たけやぶに囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒かじぼうを下しました。もう鼠色のペンキの剥はげかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯ちようちんの明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札ひょうさつがかかっています。

マテイラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君

は永年印度の独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門ぼらもんの秘法を学んだ、年の若い魔術まじゅつの大家なのです。私はちようど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあつても、肝腎かんじんの魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使つて見せてくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たの

です。

私は雨に濡れながら、おぼつか 覚束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にあるよびりん 呼鈴のボタン 釦を押しました。すると間もなく戸が開あいて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出でですか。」

「いらつしやいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんはあいそ 愛想よくこう言いながら、すぐその玄関

のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出ででした。」

色のまつ黒な、眼の大きい、柔やわらかな口髭くちひげのあるミスラ君は、テエブルの上にある石油ランプの心しんを撚ねじりながら、元気よく私に挨拶あいさつしました。

「いや、あなたの魔術さえ拜見出来れば、雨くらいは何ともありません。」

私は椅子いすに腰かけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテエブルが一つ、壁側かべぎわに手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——ほかにはただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁ふちへ赤く花模様を織り出した、派手はでなテエブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目あらわが露あらわになつていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていました。が、やがてまたあの召使いの御婆さんが、紅茶の道具を持って

はいって来ると、ミスラ君は葉卷はまきの箱の蓋ふたを開けて、「どうです。一本。」と勧めすすてくれました。

ありがと  
「難有ないうう。」

私は遠慮えんりよなく葉卷を一本取つて、燐寸マツチの火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊せいれいは、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉卷へ火をつけると、にやにや笑いながら、匀においの好い煙を吐いて、



「ジンなどという精霊があると思つたのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話やわの時代のこととでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠術さいみんじゆつに過ぎないのですから。——御覧なさい。この手をただ、こうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の眼の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子いすをずり

よせながら、よくよくその花を眺めました。確かにそれは今の今まで、テエブル掛の中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持つて来ると、ちようど麝香じやこうか何かのように重苦しい匂さえるのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆かんとんの声を洩もらしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作むぞうさにその花をテエブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様になつて、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなつてしまふのです。「どうです。訳は

ないでしょう。今度は、このランプを御覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちよいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子ひょうしにどういいう訳か、ランプはまるで独楽こまのように、ぐるぐる廻り始めました。それもちゃんひんとしころと一所に止つたまま、ホヤを心棒しんぼうのようにして、勢いよく廻り始めたのです。初の内は私も胆きもをつぶして、万一火事にでもなつては大変だと、何度もひやひやしました。ミスラ君は静に紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子ようすもありません。そこで私もしまいには、すっかり度胸どくちやうが据すわつてしまつて、だ

んだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めていました。

また実際ランプの蓋かさが風を起して廻る中に、黄いろい焰ほのおがたった一つ、瞬またたきもせずにともっているのは、何とも言えず美しい、不思議な見物みものだったのです。が、その内にランプの廻るのが、いよいよ速すみやかになって行つて、とうとう廻つていゝとは見えないほど、澄み渡つたと思ひますと、いつの間まにか、前のようにホヤ一つ歪ゆがんだ気色けしきもなく、テーブルの上に据たつていました。「驚おどろきましたか。こんなことはほんの子供こども瞞だましですよ。

それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入  
れましょう。」

ミスラ君は後うしろを振返つて、壁側かべぎわの書棚を眺めました  
が、やがてその方へ手をさし伸ばして、招くように指  
を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ  
動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。

そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛  
び交う蝙蝠こうもりのように、ひらひらと宙へ舞上るのです。

私は葉巻を口へ啣くわえたまま、呆気あっけにとられて見ていま  
したが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由

に飛び廻つて、一々行儀よくテエブルの上へピラミツド形に積み上りました。しかも残らずこちらへ移つてしまつたと思うと、すぐに最初来たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還かえつて行くじやありませんか。が、中でも一番面白かつたのは、うすい仮綴かりとじの書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落さかおとしに私の膝へさつと下りて来たことです。どうしたのかと思つて手にとつて見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ

君へ貸した覚えがある、フランス仏蘭西の新しい小説でした。

ながなが「永々御本を難有う。ありがと」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言  
いました。もちろん勿論その時はもう多くの書物が、みんなテ  
エブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまっていたの  
です。私は夢からさめたような心もちで、さんじ暫時は挨拶  
さえ出来ませんでした。その内にさつきミスラ君の  
言った、「私の魔術などというものは、あなたでも使お  
うと思えば使えるのです。」という言葉を思い出しま  
したから、

「いや、兼ね兼ね評判ひょうばんはうかがっていましたが、あなた

のお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで私のような人間にも、使つて使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作ぞうさなく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじつと私の顔を眺めながら、いつになく真面目まじめな口調になつて、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カン  
の魔術を習おうと思つたら、まず欲を捨てることです。



あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後あとから言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無駄ぶしつけだとも思つたのでしよう。やがて大様におおよう頷うなずきながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使え  
ると言つても、習うのには暇もかかりますから、今夜

は私の所へ御泊りなさい。」おとま

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ御礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓着とんちやくする気色けしきもなく、静に椅子から立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじつと見上げました。

×

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかり  
 たった後ののちのことです。これもやはりざあざあ雨の降る  
 晩でしたが、私は銀座のある倶楽部くらぶの一室で、五六人  
 の友人と、暖炉だんろの前へ陣取りながら、気軽な雑談に  
 耽たっていました。

×

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る  
あまあし雨脚も、しつきりなく往来する自動車や馬車の屋根を

×

濡らすせいか、あの、大森の竹藪おおもりにしぶくような、ものさびしい音は聞えませぬ。

勿論窓の内の陽気なことも、明い電燈の光と言ひ、大きなモロッコ皮の椅子いすと言ひ、あるいはまた滑かに光っている寄木細工よせぎざいくの床ゆかと言ひ、見るから精霊せいれいでも出て来そうな、ミスラ君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくは獵りようの話だの競馬の話だのをしていましたが、その内に一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉だんろの中に抛りこんで、私の方へ振

り向きながら、

「君は近頃魔術を使うという評判だが、ひようばんどうだい。今夜は一つ僕たちの前で使つて見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭をもた寄せたまま、さも魔術の名人らしく、おうへい横柄にこう答えました。

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師てじなしなどには出来そうもない、不思議な術を使つて見せてくれ給え。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり

寄せながら、促すように私の方を眺めました。そこで私は徐おもむろに立ち上つて、

「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛しかけもないのだから。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛さかっている石炭を、無造作むぞうさに掌の上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆あらざきもを挫ひしがれたのでしよう。皆顔を見合せながらうつかり側へ寄つて火傷やけどでもしては大変だと、気味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。

そこで私の方はいよいよ落着き払って、その掌の上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工の床ゆかへ撒まき散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変わった雨の音が俄にわかに床の上から起つたのは。と言うのはまつ赤な石炭の火が、私の掌てのひらを離れると同時に、無数の美しい金貨になって、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、茫然と喝采かつさいするのさえも忘れていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮べながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。

「こりや皆ほんとうの金貨かい。」

呆気あっけにとられていた友人の一人が、ようやくこう私たずに尋ねたのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思つたら、手にとって見給え。」

「まさか火傷やけどをするようなことはあるまいね。」



友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとつて見ましたが、

「成程こりやほんとうの金貨だ。おい、給仕、ほうき箒と塵取りとを持って来て、これを皆掃き集めてくれ。」

給仕はすぐに言いつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、うずたか堆く側のテエブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテエブルのまわりを囲みながら、「ざつと二十万円くらいはありそうだね。」

「いや、もつとありそうだ。きやしや華奢なテエブルだった日には、つぶれてしまいうくらいあるじゃないか。」

「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないような金満家になってしまふだろう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子いすによりかかったまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起したら、二度と使うことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ抛ほうりこんでしまおうと思っっている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合せたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もつたいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に抛りこむと、剛情こうじょうに友人たちと争あいました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾こうかつだという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたった所で、議論が干ひないのは当り前だろう。そこで僕が思うには、

この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌かるたをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にすると何にするとも、自由に君が始末するが好いい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡し給え。そうすれば御互の申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、いよいよ嘲あざけるような笑えみを浮べながら、私とテエブルの上の金貨とを咬するそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちと骨牌かるたをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取りられたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、折角せつかくの君の決心も怪しくなってくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」

「それなら骨牌かるたをやり給えな。」

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手もとでに、どうしても骨牌かるたを闘はわせなければならぬ羽目はめに立ち

至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机かるたづくえを囲みながら、まだためらい勝ちな私を早く早くと急せぎ立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々いやいや骨牌かるたをしていました。が、どういふも

のか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌かるた上手でもない私が、嘘のようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかつたのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつ

か私は一切を忘れて、熱心に骨牌かるたを引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲まき上げるつもりで、わざわざ骨牌かるたを始めたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相けっそうさえ変るかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高きんだかだけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、気違ふだいのような勢いで、私の前に、札ふだをつきつけ

ながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自働車も、一つ残らず賭けてしまふ。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの刹那せつなに欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入



れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐かひがあるのでしよう。そう思うと私は矢も楯たてもたまらなくなつて、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇つた声を挙げながら、まっ蒼になつた相手の眼の前へ、引き当てた札ふだを出して見せました。すると不思議にもその骨牌かるたの王様キングが、まるで魂がはいつ

たように、冠かんむりをかぶつた頭を擡もたげて、ひよいと札ふだの外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういふ訳か、窓の外に降る雨脚あまあしまでが、急にまたあの大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降ぶりの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗

い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌かるたの王様キングのような微笑を浮べているミスラ君と、向い合つて坐っていたのです。

私が指の間に挟はさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにとまっている所を見ても、私が一月ばかりたつたと思つたのは、ほんの二三分の間に見た、夢だつたのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということとは、私自身にもミスラ君にも、明かになつてしまつたのです。私は恥しそうに頭を下げたま

ま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思つたら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上に肘ひじをついて、静にこう私をたしなめました。

（大正八年十一月十日）





魔術

芥川龍之介 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ